不登校児童・生徒支援事例報告書

理由不明の不登校生徒に対して実施している支援について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は２年生の女子であり、学校で嫌なことがあって不登校となっているわけではない。不登校の原因は本人も分からない。また、高校生の姉がおり、その姉が中学時代から不登校状態である。姉が学校へ行かない姿を見ていることもあり、自分も学校に行かなくてもいい、なぜ自分は学校へ行かなければいけないのか、と感じている。

具体的な取組

本人と担任との関係が不良であり、両者の橋渡しをしている。本人との信頼関係構築のため、話のすべてを担任に伝えることはできないが、本人が伝えにくい内容、支援員の表現や言葉を介すことで、担任に本人のことを理解してもらいやすくなるよう仲介役として支援に取り組んでいる。

学習への意欲は高いと言えないが、教科書を全て持参し別室に来所する。持ってくること自体が安心材料となっているため、置いてくるような指示はしない。

本人の言動について否定はせず、まずは受容する姿勢で接し、別室が安心して過ごせる居場所になれるよう働きかけている。

登校後、担任とのやりとりしたあとは不機嫌、支援に対して拒否的になることが多い。様子をつぶさに観察し、不機嫌であるならば、クールダウンのため図書室に行くことを促したり、拒否反応が起きないように声掛けをしたりしている。「学校には自分を見てくれる大人がいる」と思える関係構築を心掛けている。

別室内に飾り気がないので、大きな模造紙を用意し、利用生徒たちに壁に貼る絵を描いてもらっている。「学校に来て何をする」ではなく「これをやりたいから学校に行く」というモチベーションをもてるようにする。

成果

別室登校に慣れ、教室への意識も変化が見られ、給食を教室で食べられるようになり、そのまま教室に居られるようになった。また、以前は鞄を別室に置いたまま教室に足を運んでいたが、今では鞄を持って教室に行けるようになった。意識の変化が見られる。

課題

不登校の原因が分からないため、無暗に教室復帰を促すのではなく本人に合わせた学校での過ごし方、支援を模索する必要がある。

不登校児童・生徒支援事例報告書

安心して登校～別室利用するための支援について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、３年生男子で１年生の頃から不登校状態であった。身体的な発育が他児よりも遅い。劣等感により学校に足が向かなくなった。現在に至るまで他生徒との交流は出来ないが、大人との交流は積極的である。家庭での生活面にフォロー不足が見受けられ、生活リズムも安定しない。

具体的な取組

他生徒との交流はもとより、見られることにも強い拒否感を抱いているため、他生徒の目に触れないよう、直接、別室に登校することが出来るよう、本来開門しない学校の裏門を利用することを許可しており、ストレスなく別室に登校できるよう配慮を行っている。

支援員が職員室や事務室に連れて行き、全職員に当該生徒を紹介し、顔や別室利用の背景の理解を促した。

本人から学校に電話連絡があった場合には、事務員であっても「忘れ物をしないように」等声掛けをし、生活支援的な意味合いをもつようになり、本人も大人が関わっている安心感を覚えている。

当人に限らず、別室内では座席を固定せず、本人が自由な場所に席を移動、配置してよいことにしている。他者との距離感や、居心地の良さを感じる場所は生徒ごとに違っており、生徒自身が納得する場所を選べるようにしている。

本人は勉強への意欲があるが、自分だけで取り組むことは難しい。支援員も教員ではなく、分からないことが多いため、一緒に調べ、意見し、生徒と対等な立場で共に学び合うことを重視し、勉強に取り組んでいる。

同じ目線で考え、共につまずきながら、意欲向上のサポートを行っている。

成果

学校外でも「自分は不登校だったが、別室登校を頑張っている」と主張できるほど、自己肯定感が向上。別室が学校内の自分の居場所だと思えるようになっている。共に勉強している支援員と早く結果を共有したいとテストの自己採点もするようになった。

課題

学校の中で活動内容が浸透していない。担任によって協力姿勢が違う。活動を理解してもらえた方が、情報共有が円滑になる。

不登校児童・生徒支援事例報告書

友人トラブルにより教室に入れない生徒の支援について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、１年生男子である。クラス内の友人に悪口を言われてしまったことで、当該友人と同じ空間にいられなくなってしまったことで、一時期不登校となってしまう。担任が別室を案内したところ、別室に登校することになった。

具体的な取組

別室では学習することを無理強いしていない。生徒自身の意思に任せている。当該生徒には、学習に取り組まなければいけないという意識があったため、別室内で自分の学級のライブ配信授業を見ることを勧めた。それぞれ生徒に合った教室への参画方法を提案している。

別室は自学自習することが基本であるが、別室だけでの活動となると、生徒自身の息が詰まってしまうため、時折、図書室の利用を促し、本人が希望した場合は付き添うなど、居心地よく別室で校内生活が送られるように配慮している。

担任との連携や記録の共有と状況の伝達は相互に密に行っている。

本生徒の場合は、教室復帰にあたり、トラブルになった友人との関係調整が必須であったため、担任による調整状況の情報提供に基づき、本人が教室復帰しやすいタイミングを推し量った。

本人が教室に復帰したい意思をもっていたため、本人が得意な科目から少しずつ授業に出ることを提案した。得意な科目は周囲への適応がスムーズに進むため、参加により自信をつけさせ、自己肯定感を養っていくことで、最終目標である教室復帰への足掛かりとしている。

成果

教室に戻るためのワンクッションとして、別室でライブ配信授業を見る等、学校内で教室の雰囲気を感じ、生徒が教室との結びつきを感じることで、不登校を未然に防ぐことに寄与している。教室に戻った後も、別室利用なく学校生活を送れている。

課題

別室の存在は校内へ浸透しているが、継続利用者は多くない。完全不登校生徒をいかに別室登校につなげるかが課題である。